

令和8・9年度 研究主題

幼児が主体的に遊ぶための環境とは
— やってみたいと心を動かして遊ぶ姿から —

第2回 研究部会 令和8年6月17日（水） 場 所 大阪市立墨江幼稚園

本日の保育の視点

- ① 幼児がやってみたいと心を動かして遊ぶ姿とはどのような姿であったか。
- ② ①につながる、教師の教育的意図をもった働きかけ（環境・関わり）はどのようなものであったか。

研究討議・分科会

ダンス・体操をする

視点①

- ・好きな曲を自分で選び、本物のアイドルのようにステージでリズムに乗り歌ったり踊ったりしていた。
- ・楽屋スペースで衣装を着用したり、鏡に向かって身支度を整えたりして、ステージに向かっていた。
- ・観客席でうちわを持って応援したり、カメラを構えて撮影したりしていた。
- ・応援するためのうちわをつくっていた。

視点②

- ・子どもの思いを実現できるように、ステージにはミラーボールや飾りがあり、なりきって遊べるように、自分で選べるポンポンやリボンなどが用意されていた。
- ・気持ちを切り替えられるように、メイクができるような鏡がある部屋があった。
- ・踊るだけでなく、様々な参加の仕方ができるように、応援したりつくったりできる環境を準備していた。



釣りごっこをする

視点①

- ・本物のリールのような釣り竿でリールを投げたり、巻いたりして何度も魚釣りをしていた。
- ・いろいろな種類の魚を釣り、釣った魚をクーラーボックスに入れていた。
- ・図鑑を見ながら、いろいろな種類の魚をつくっていた。

視点②

- ・イメージする魚釣りが実現できるように、リール付きの竿やクーラーボックスなど幼児の考えを受け止めながら準備していた。
- ・釣りたい魚を釣れるように、どうしたら釣れるかを教師も一緒に考えていた。
- ・海の生き物ポスターや図鑑は、すぐに見られるように目に付く場所にあり、海の生き物のイメージを膨らませてくれるように、いろいろな材料が用意されていた。



アスレチックごっこをする

視点①

- ・自分たちでつくったコースで、好きなコースを選び、繰り返しアスレチックを楽しんでいた。
- ・ダンスの曲のリズムに合わせてトランポリンを跳びながら、マラカスを振っていた。

視点②

- ・コースを選びいろいろなやり方で何度もやってみようと思えるように、毎日違うコースを自分たちで作り替えることができる環境であった。
- ・意欲につながるように、遊びごとの導線を工夫し、隣のダンスの場の小道具を取り入れて遊んでいることを認めていた。



パン屋さん、ジュース屋さんで遊ぶ

視点①

- ・エプロンを着けて店員になり、客に注文を聞き、商品を渡す・つくるなどしていた。
- ・友達と相談しながら注文されたジュースをつくっていた。

視点②

- ・なりきって遊べるようにエプロンが用意されており、いろいろな種類のパンがあり、ジュースになるスズランテープは色ごとに並べられていた。
- ・やりとりを楽しめるように、教師がお客さんになっていた。
- ・商品を並べたり、戻したり用意できるように、ビニールテープで色分けされたパンの陳列棚があった。



指導講評 大阪市教育委員会事務局 指導部 初等・中学校教育担当 指導主事

～子どもの「やりたい」が響き合う、暖かな保育の風景～

○研究保育について

- ・子どものやりたい気持ちを形にするだけではなく、一步広げられる仕掛けがあった。子どもの願いを受け止め、環境の再構成をし、さらに異年齢の刺激があったことで、広がりのある遊びになっていったのではないかな。
- ・教師の援助は大切である。子どもに寄り添いながら、イメージを共有できるように援助を行っていた。すぐ答えを与えるのではなく、子どものアイデアを認め、試行錯誤を見守る姿勢が教師間で一貫していた。
- ・口を出しすぎるのではなく見守ること、介入するタイミングを見図ることが必要である。
- ・動画視聴もあり、これまでの遊びの経過を知ることから、今日の遊びの理解を深めることができたのではないかな。
- ・振り返りの時間も豊かだった。子どもの思いを言葉にして、友達の良さを共有できるようにしたこと、自分の遊びが認められる自己肯定感が高まったのではないかな。また、明日の遊びへの期待につながったのではないかな。



○小学校への接続に向けて

- ・小学校への接続は、教科の先取りではなく、学びの芽生えや姿勢を育むことである。
- ・釣りごっこでの図鑑を開く、比べる、試すという遊びは、生活、理科の観察と「探究の型」の入り口につながる。異年齢交流・アスレチックの遊びの中での葛藤は、集団生活へとつながる。パン屋さんに「来てほしい」「説明したい」という願いは、国語の話す、聞く、語彙の調整「言葉の必然性」につながる。商品のやりとり、順番、形を組み合わせるなどの経験は、算数の数量、図形、比較「目的をもった数の活用」につながる。ダンス、衣装づくり、イメージを形にしてみてもらふ喜びは、音楽、図工、体育の表現の喜び、次の意欲を支えることにつながる。振り返りの時間で、工夫や次への思いを語ることは、学習の基礎を固める基盤となる。これらの様子から、今日の保育では、協同性、思考力の芽生え、豊かな感性と表現など幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が随所に見られた。

【総合教育センター 指導主事より】

- ・文部科学省 6月5日に教育課程部会 幼児教育ワーキンググループ 保育専門委員会 第9回が開催された。幼児の姿を丁寧に見とり、記録し、遊びの中の学びを見とった上で指導計画の修正、環境の再構成、必要な援助の改善につなげていくことが求められている。幼児の姿を園の先生と共有し保護者や地域に共有することで、幼児教育の価値がより伝わり、子どもの育ちを連続的に伝えていくことにつながるのではないかな。

学んだこと

- ・幼児の実態に合わせ、興味をもっている遊びを広げ、やりたい気持ちを形にすることで、主体的に遊ぶ姿が見られることが分かった。振り返りでやりたい気持ちや実現したいイメージなどを話し合う機会をもち、それを実現できるような環境を整えることで、遊びが深まり、友達との関わりも広がっていくことを学んだ。
- ・幼児が思いを出しながら遊ぶことを楽しめるように、場づくりや配置など、自分から遊びたくなる環境を工夫し、幼児自身のアイデアを受け止めたり、幼児同士の関わりを見守ったりと、幼児の姿に合わせて環境や関わり方を工夫して働きかけることが大切である。